



ICT国際戦略の将来展望 ～総務審議官の任を終えて～

前 総務省 顧問 よしざき まさひろ
吉崎 正弘



1. はじめに

吉崎でございます。御紹介ありましたようにこれまでたくさんポストを務めてきました。35年で32個のポスト——1か所につき13か月平均でした。昨年の9月にこの例会でお話しした時は、まだ国際担当の総務審議官に着任したばかり。ほとんど全くのドメスティックな人間でしたが、始めて1年間は国際を担当しました。そして今年（2014年）の7月に退官し、総務省顧問という形になりましたが、それも昨日で終わり、今や何もありません。昔だったらバッジがあって、物も書かずにずっと入れていた所が、紙にこまごまと書いてなおかつ所属に「無し」と書かなければいけなくて、ちょっと寂しい思いもしました。とはいえ、今は華の失業者をやっております。

2. トップセールスとしての外交

1年間を振り返り、特にITUの皆様に関係しそうな話をしたいと思います。一つは外交。去年1年間、いろいろと見て回って、「いやまあ良かった」と思いました。それまでは日本の存在感が見えなくて一体何をしているんだろうか——ということをお米に限らず、アジア、アフリカ、いろんな国々から聞かれました。ところが、今は随分と活発に外交されるようになって、少なくとも今、日本の存在は無限大に広がったという状況になってきています。

総理の外遊はものすごい数で、そこで具体的にどういう事象が起きているか分かりにくいかもしれません。まず総理が外遊に行かれると報道関係者が付いてきます。新聞社やTV局が付いてこようとしますが、その旅費がなくなってきたのが実情です。総理が一生懸命やっておられますから、各大臣も当然非常に多く回るようになります。新藤大臣は在任がちょっと長く1年半強ですけれども、その間に7回外遊されました。それまでは大体1年に1回、あるいは1在任期間中に1回というところで、総務省の国際担当にしてみれば年に1度のビッグイベントでした。ところが、1年半で7回ですので、ほとんど日常的なイベントになっています。そんな状況でありました。

この政権においては外交が非常に熱心に行われておりますが、そのキーワードの一つが「トップセールス」です。総理が先頭に立たれて原子力発電あるいは新幹線、日本食、クールジャパンなどを売り込んでいます。あの手この手で日本を売っていかようとしています。それは日本の商品をお金を稼ぐだけでなく、日本を理解してもらい、日本に愛着を持ってもらう、という大きな狙いがあります。そうした狙いの中で総務省は地デジを広めてきました。地デジを1番バッテリーとして、その後いろいろなラインナップをそろえてICT全般を売り込んでいく——というのがここ1年間の国際政策の柱であり、今も変わらずに続けております。

3. 各国への地デジ売り込み-1

去年の9月の時点では、地デジ導入に火がつきそうな所として、モザンビークやアンゴラ、ホンジュラス、スリランカ、モルディブ、フィリピンなどがあると申し上げました。そして「経協インフラ戦略会議」でも地デジがインフラ——普通インフラというと鉄道や道路、橋になりますが——の仲間入りをすると言っておりましたけど、実際そのようになっています。

今申し上げた国の中にはうまくいった国もあれば駄目だった国もあります。駄目だった国はモザンビークとアンゴラです。南部アフリカの中で一番中心の国というと南アフリカで、いち早くヨーロッパ方式を採用していました。日本が特にモザンビーク、アンゴラ、そしてボツアナといった辺りを掘り始めて、かなり手応えが出てきたところでしたが、南アフリカから結構な圧力がかかって、モザンビークとアンゴラは、残念ながらヨーロッパ方式で固まってしまいました。そうした中でも、南アフリカやモザンビーク、アンゴラに囲まれたボツアナが日本方式を採用しました。また中米では他にホンジュラスが日本方式を採用しました。したがって中南米で日本方式になっていないのはコロンビアぐらいです。

なぜ中南米で一生懸命やれたかという、これは私のもう少し前の先輩が初めて南米に出張してコロンビアに泊まった



その日にヨーロッパ方式が採用されてしまったそうです。そこで一念発起して一番のへそであるブラジルを抑え、ブラジルから南米、あるいはブラジルから中米と活動していただいたおかげで、中南米ではとても日本方式が多くなったという背景があります。

またスリランカとモルディブは、新藤大臣が以前からパイプが太かったところで、それらをうまく活用していけるかどうかというところになっていました。ASEANは大体ヨーロッパ方式で、一部が中国方式に決まってしまうしていました。なぜなら日本国内の「地デジ化」で精一杯だったので、外国まで売り込みに行かず、その間に素早く決められてしまいました。これがシンガポールに代表されるASEANの状況でしたが、その中で残っていたのがフィリピンです。そこを掘ろうというのが、去年の9月くらいの気持ちでした。そしてもう残っている国、手つかずの国は北部アフリカと中部アフリカぐらいしかありません。

多くの国で、放送を扱っている官庁は大体通信を扱っている官庁と重複しています。日本もそうです。そこで、これまで培った人脈を活用してICT全般を売り込んでいこうと考えたわけです。当然のことながら1番バッテリーは地デジの送信設備。2番目は地デジの受信機。3番目は放送のコンテンツ。4番目がその他のICT——特にソリューションと呼ばれるシステムを売り込んでいこうと思ったわけです。売り込んでいくとなると、先進国は自国の企業が押えていて新たな隙間は余りなく、勢い行った所は赤道近辺が多かった、という1年でした。

4. 各国への地デジ売り込み-2

昨年の秋、安倍総理がフィリピンの大統領と話をし、日本方式にほとんど決まりました。1月には大統領が来日する一方、新藤大臣がフィリピンへ行き、同時に日本企業総勢70社、170名も同行し、あの手この手で売り込んできました。そして地デジは日本方式に決まり、周波数の調整をしているところです。そろそろ試験放送を全国的に実施し、2015年には本放送をできるようにすると聞いています。

昨年の秋には台風がセブ島を襲い、非常に大きな災害になりました。そこで防災とICTをなんとか組み合わせられないか、またICT自体も台風などの災害に強いものにし、予知

をする、情報を的確に送る、そのために的確にICTを使い、という要望に応えようと、様々なICTソリューションが日本企業からアプローチされ、既にビジネスの契約が幾つかできています。地デジの緊急放送にも関心が高いようです。

スリランカはもともとヨーロッパ方式で決まっていたのですが、なかなか進まないで、去年の春に完全に日本方式にすることを決定しました。いろいろなアナログの放送局があり、本当にデジタルへ移行できるかという問題があります。それができないなら、アナログに消えてもらわなければなりません。デジタルの周波数をどう割り当てるか、フィジビリティスタディを実施しています。ODAとして130億円ほど出そうということで、円借款で決まっており、来年には放送できるように進めております。

モルディブは割と小さな国です。多数の島があり、温暖化で浸水被害に遭っていることで有名かと思います。そこへ送信機を入れようと、円借款でかなりの額を入れる予定です。大臣と一緒にモルディブへ行ってびっくりしたのは、日本と言うと銀座の真ん中ぐらいの所で蛍光灯のスイッチが突然入ったり、幽霊が出たりという話があったことです。何が原因だろうか調べて見るとどうも電波らしい。よくよく調べてみたら、町の真ん中に高いポールが立っていて、AMラジオの送信機が柵も何もないに設置されていました。そこからものすごい出力の電波が出ていたのです。その下で子供たちがサッカーをしていたり、近所の病院の計器が狂っていたりするなど、ひどい有様でした。これもこの際だからということで、近所の無人島へ日本のお金で移すことにしました。

ボツアナは感染症にひどく悩まされています。もともと南アフリカが独立するときに、一部の部族が出て行って作ったのがボツアナです。当時は、何も資源がなくやせた土地にやせた牛がいる貧しい国でした。それが独立後にダイヤモンドが発見され国営になりました。ボツアナ政府はこの資源を活用して人材を育成し、自立した国になることを目標にしています。しかし人がとても大事といいながら感染症が蔓延していて、国民が命をどんどん落としています。その解決に本当は病院が必要なのですが病院はなく、医者が欲しいのですが医者がいません。そこで、日本の地デジ方式に実装されているデータ放送で健康情報を流すことを検討しています。とりあえずこれを医者が病院で診断する前の段階として実施したいようです。似た話で、子供たちを育てたいが、学校がない



し、先生もいない。したがってそれらを整備する前の段階として日本の地デジ方式——そのデータ放送でコンテンツを流したい、というのが彼らの願いです。

ボツアナにはダイヤモンドがありますから、彼ら自身で予算措置ができます。そこで日本に何をしたいかという、文化コンテンツ、特に子供向けに、NHKが持っている理数系の番組を出して欲しいということで、そういった番組を提供しています。こうした国が健気に努力していることに応えるためにも、特に周りのアンゴラやモザンビークが他の方式を採用した中で、ボツアナを絶対に成功させよう、日本方式のアフリカにおけるショールームをボツアナにしよう、というのが新藤大臣の考え方でした。

またインドも大きな市場なので関心が高く、官民ミッションで取り組んできました。インドには十数億の人がいて、市場として期待できる感じですが、実はとても難しい国です。なぜなら言語あるいは州が20数個に分かれていて、それぞれの州が一つの国と考えられるからです。ちょうどEUとヨーロッパ各国のような感じで、インド中央政府と州があり、さらに州をまたぐと関税がかかってしまいます。日本企業もチャレンジしているがとても苦労しているのが実情です。こういう場合は官民ミッションで行った方が受入れ側の敷居が下がるので、あれこれとやっているところです。

インドが特に欲しがっているICT技術は、携帯電話基地局における電力問題の解決策です。できるならソーラーパネルを使い、蓄電池を設置して自立できる基地局を作りたい、というのが彼らの目指すところです。特に高いけど良い日本製品を少しダウングレードしたようなグリーンICT—省エネ型基地局に関心が高いです。

中南米についてはなかなか遠くに行きにくいのが実情です。各国に出ている大使が年に1回日本に戻ってきて、大使会議というものを開いています。私も何度か出席してお話しましたが、ASEANなどの大使会議は様々なメニューがありますから、地デジやICTの話をして余り興味を示してもらえません。一方で中南米の会議ではとても好評です。他の案件がほとんどなくて、地デジICTが数少ない中で光っているということです。遠くても民間企業にとって魅力ある市場にできないかと考えています。

5. ITUとインターネット規制

インターネット規制について、ITUは？ というのですが、規則の見直しの時には相当激しくやり合いましたが、今はインターネットガバナンスに注目が集まっています。インターネットは無秩序でいいのか、という問いかけがいろいろな場で——国連でも、ITUでも出てきています。発端はアラブの春。ネットを使うことで瞬間的に、かつ広く情報伝達ができるようになり、政権交代などができるようになってきました。政情不安な国ほど規制をかけたいと考えているようです。ところがネットは国境と関係なく広がっていて、そんなことが技術的にできるのかという話もあります。一方で、自由な情報を流通させることが重要だというのが欧米や日本、先進国の考えであって、全く話が合わないのですけれども、それをITUの場で議論しようという動きが特に中近東アラブを中心に強く出てきています。

ITUはもともと技術的な標準を中心に議論する場であって、上位レイヤーよりは下位レイヤーのところ、文化系的というよりは理科系的なところをやるどころだと我々は考えています。歴史的にもそうでした。そもそもしたくないのですが、情報をコントロールできるわけもなく、ITUで議論しようという動きが先進国以外の所で出てきていて、反動として欧米がITUに嫌気がさしているという状況。それでお金も人もあまり出したいくないという気持ちが強くなっているようです。先進国の中で一番愚直に対応しているのが日本で、日本に対する期待が高まっています。最近では、ドラフトについてメールで各国が相当激しくやっていますが、最後のセレモニーをジュネーブでやりながら、ヨーロッパの人はほとんど来っていないのが実情です。これからITUはどうなるのか気になるところです。

そうした中で、釜山でそろそろ全権委員会議があります。多分、今次長を務めているホーリン・ザオ氏がトゥーレ氏の後を継ぐことになるでしょう。あとは次長、局長の選挙、そしてRRB委員の選挙になります。日本からはRRB委員に伊藤さんが立候補しています。それから理事国の選挙もあって、日本も継続して務めようとしています。ところが、局長選挙には残念ながら候補を出していません。T局の局長の有力候補の一人が韓国人です。中国がトップで、韓国が局長にいる、ということは極東としてみれば良いことに思えます。しかし4年後、8年後の選挙に日本から誰かが出ようとした場



合、いかがなものか、という声が出てきてしまうのではないかと危惧しています。

6. おわりに

最後にこの1年間の感想をちょっと情緒的になりますが、お話しして終わりにしたいと思います。

初めて国際の仕事をしました。国際化とインターナショナルは全く別のことであると強く感じた1年でした。日本は少子高齢化で人口がどんどん減っていくと言われていて、一方、介護の人たちがフィリピンなどから一杯入ってきていただいています。ところが日本は「それはそれ、あれはあれ」で終わっています。似たような島国にイギリスがあって、夫婦で今1.6人の子供を作っています。日本は1.3人で、イギリスの方がちょっと多いのです。そしてイギリスはどんどん人口が増えていて今は7000万人程ですが、30年後には八千数百万人となり日本と並ぶだろうと言われていて、なぜなら、ポーランドを中心とした移民がたくさん入ってきているからです。

移民に伴うプラスもあればマイナスもありますが、日本は鎖国をしたまま国際化をしている感じがしました。もっとインターナショナルになれば、日本の国内市場は小さくなりません。その代わりにいろいろな弊害が出るかもしれません。ト

ータルで考え、議論する時期に来ているのではないかと、というのが印象です。

他にもいろいろ感じたことはありましたが、退官するまでは1億人を相手に仕事をしているような気持ちでした。晴れて仕事もなく、収入もなくなった現在、やはり家族は大事だとやっと思えるようになりました。父親不在のような状態にしてしまっていた反省かもしれません。でもいろいろな思いをしたこの1年でした。初めての国際でしたが、こういうような環境においていただいたことをとても感謝しています。そうでなければ私は英語なんかもう絶対に勉強しなかったと思います。日本の国内の地理は勉強したかもしれませんが、外国の状況なんかは勉強しなかったと思います。でもそうせざるを得ない状況に置いていただいたことで、私の引き出しを非常に大きくさせていただいたと思っています。

どうか本日お集まりの皆様はITUゆかりの皆様ですので、それぞれのお立場で是非、国際、インターナショナルを含めて、日本を世界へ羽ばたかせるよう御活躍いただけることを期待申し上げます、私のお話とさせていただきます。ありがとうございました。

※本記事は2014年10月1日開催の第411回ITUクラブ時点のものをリライトしたものです。

(編集責任：日本ITU協会)